

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 趙 月梅

論 文 題 目

現代におけるドルブットモンゴル族の村落生活に関する研究－
中国黒龍江省ドルブットモンゴル族自治県の布村を事例として－

論文審査担当者

主 査

	名古屋大学	教授	櫻井龍彦
委員	名古屋大学	教授	成田克史
委員	名古屋大学	准教授	笠井直美
委員	名古屋大学	准教授	サヴェリエフ・イゴリ

論文審査の結果の要旨

1, 本論文の構成と概要

中国において近代化、市場経済化が急速に進展するにつれ、モンゴル族の一部は、伝統的な遊牧生活から次第に定住へ、さらに漢族との混住へと生活スタイルを転換し、村落で農耕を営むようになってきている。この変遷によっていま民族文化がどのような実態になっているのかを内モンゴル東部の異文化接触地域に居住するドルブットモンゴル族を事例に、文化変遷の特徴や要因について詳細に論じている。具体的には、家族組織、衣食住、生業、人生儀礼、年中行事、信仰活動など多様な生活領域から総合的に捉えたもので、一つの村落の民俗誌としてのまとまりをもつ。主要な観点はモンゴル族の遊牧文化が漢族の農耕文化によって吸収され、伝統が衰退していくというような一方的な展開とみるのではなく、異文化の接触と融合によって文化の再編や再創造が発生しているダイナミックな複合現象として対象を捉えようとする点にある。

本論文は序章から終章まで全体で 10 章から構成されている。

1, 序章では、研究の背景、視点と意義、研究対象地域、先行研究の概要、用語の定義、研究方法などを述べ、論文全体の構成を説明する。

現地調査は 2009 年からの 6 年間で計 14 回に及び、ドルブットモンゴル族を中心に聞き取り調査、アンケート調査、参与観察の人類学的な方法で大量の一次資料を集めている。

2, 第 1 章では、ドルブットモンゴル族自治県の形成史と調査対象地である布村の概要を記している。文献からみるとこの地は清朝 17 世紀後半からすでに遊牧から定住への変遷がはじまっていることがわかる。ドルブットはもともと部族名であったが、定住化がすすむにつれて地名として固定化していき、今日では行政上自治県となった歴史を解説している。布村の形成史については明確な文献記録がないが、boga という鹿を意味するモンゴル語の村名と村の西にある bayin oboo という石積みの祭壇の由来から布村の形成史を論じ、1648 年にはモンゴル族の牧畜村落になっていて、その後モンゴル族を中心とした漢族との混住村落となっていく過程を解き明かしている。

3, 第 2 章では、布村の村落社会としての基本構成を家族構成、その機能、親族組織、家族を超えた村内の社交関係などから論じている。布村は主としてモンゴル族、漢族、満州族からなるが、婚姻形態からみると蒙族家族、蒙・漢通婚家族、漢族家族、蒙・満通婚家族、満・漢通婚家族の順に多い。家族の機能については、オグバーンの「家族機能縮小」説を参考に性的機能、経済機能、精神安定機能などの視点からその変遷を分析している。親族関係では、モンゴル族の遊牧社会に適応した父系出自構造が、現在の定住村落社会になってもなお存在していることを述べる。家族親族以外の村内関係は「把兄弟」という忠実性を重んじる義兄弟やマージャン仲間としての「麻友」が金銭援助や交際関係で自律排他的な性格をもっているとする。

4, 第 3 章では、布村の衣食住生活の現状と特徴について論じている。いずれもドルブットモンゴル族が遊牧から定住へと移行する過程で、どのように変遷していったかが焦点である。服飾文化では服飾の利用率、色彩の嗜好傾向、デザイン、素材、消費などの面から論じ、定住になっても遊牧時代のベルト重視の傾向がみられるという。食文化では主食類、副食類、間食類、飲料類などの面から論じ、モンゴル族の伝統的な飲食習俗が衰退もしくは消失する反面、東北地域漢族の飲食習俗がかなり浸透しているという。住居文化は生業のあり方と居住環境によって左右されるが、遊牧文化に適した移動性の高いゲルから定住に変われば土壁と瓦屋根をもつ家屋になっていく。とくに 2014 年の政府

論文審査の結果の要旨

による家屋再建政策によって、これまで多少は遊牧的要素が残っていた「泥草房」から完全にレンガ式住居に変わったことを指摘する。これは単に漢族からの地域的な影響とはいえ、社会全体が近代化した結果である。

5, 第4章では、家畜の飼料、飲用水、家畜小屋の建設、牧畜道具さらにモンゴル族の伝統的な家畜飼育習俗の変化などから布村における牧畜業の生産習俗の現状と変遷を論じている。かつてモンゴル族が「五畜」を飼育するのは乳、肉、皮などの畜産物を獲得し生活の基本を維持するためであった。しかし今日では家畜が屠殺対象というよりは交換価値を持つ商品となり、家畜の種類も乳製品の販売のために乳牛を主とした単一化の方向にある。飼育方式もこれまでの放牧と「小屋飼育」を融合させた形になっている。ドルブットモンゴル族の置かれた生態環境が農業化、近代化、市場経済化などの要因によって影響をうけ、家畜が経済的利益をもたらす商品として価値づけられてくると、これまでの牧畜業に関する生産飼育習俗も変容していくので、その実態と特徴について論じている。

6, 第5章では、布村で現在みられる出産習俗、婚姻儀礼、死にまつわる習俗を報告し、それらの形成および変遷の過程と特徴について論じている。出産習俗に関しては、布村にはモンゴル族の伝統的な天祭、オボ祭祀と関連した生命観や「子授かり」習俗が残っているほか、東北地域の漢民族にみられる「火跨ぎ」の儀礼や農耕文化の子宝祈願習俗とみられる「生む」を象徴する物品の贈答行為などが観察されるようになってきたことや事例研究から妊娠、出産、産後の過程でみられる習俗について論じている。婚姻習俗に関しては形式と儀礼の両面から考察し、いとこ婚や継承婚がみられること、儀礼ではモンゴル式と漢族式の間隔的な位置づけになることを述べる。死にまつわる習俗については、死の準備、葬儀、墓に関する習俗などを調べ、漢族の影響が見られるものの、モンゴル族の靈魂不滅観念や女人禁止観念などの下で受容されていることを論ずる。

7, 第6章では、布村の年中行事について論じている。モンゴル族の伝統行事が現在どのような状態になっているのかを2006年の文献に記載されたものと比較することで、考察している。遊牧生活と密接であった「馬ない節」「査ま会」などが行われなくなる一方、漢族の影響から「清明節」「端午節」「鬼節」などの行事や西洋からの影響でバレンタインデー、クリスマスのような外来行事も受け入れるようになってきている。モンゴル族と漢族の文化が折衷された行事として旧正月の「cagann sar (春節)」が典型的であるとし、それに関して由来伝説、食習俗、吉祥物、年始まわり、祭祀と禁忌などの側面から詳細に検討し、モンゴル文化と漢文化のそれぞれの民族的、地域的な特徴と現代的性格を反映した間隔的なものになっていることを論証している。

8, 第7章では、伝統遊戯の面から文化接触の現状と変遷要因について論じている。遊びの形成やルール、道具などは自然環境や民族生活と深く関わる。動物を相手にする生業のなかからは牧畜業とかわる材料を使って遊ぶが、そういった生業が農業によって代替されてくると農作物関連の材料に移行していく。その事例を「鹿棋」で考察している。またドルブット地域の牛と関係が深い「烏蘭紅」という遊びも牛が販売商品とされ、肉類を得るための屠殺がなくなってくると衰退していく。羊の膝蓋骨を使った galaha という遊びは、北方民族に広く見られるが、その道具にも東北漢民族の農耕文化が入りこんでいる。ドルブット地域の牧畜業を背景としていたモンゴル族の伝統的遊びの時代的变化を考察することで、伝統文化の一部継承とともに、異文化の接触による融合と変容を明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

9, 第 8 章では、宗教信仰について論じている。キリスト教、イスラム教などもあるが、仏教、シャーマニズムと関係した自然神崇拜、祖先崇拜などの割合が高く、漢族の影響から小動物を祀る「四大門」の信仰も浸透しているという。シャーマニズムを基盤とするモンゴル族にはこの動物を崇拝する民間信仰は受入やすかったと思われる。仏教信仰に関しては布村の 45 家族の実態を調べ、厳格な宗教認識はもたず、信仰の目的はもっぱら現世利益的なものになっていると指摘する。自然神崇拜のオボ祭祀も、祀られる天神は牧草地の豊穰や家畜の安全祈願のための神ではなく、農業の収穫を保つために風雨をコントロールする農業神と認識されている。信仰面においても蒙漢文化の接触による影響があることがわかる。

10, 終章では、遊牧から定着し村落を形成するようになったドルブットモンゴル族の民族文化の変遷、特徴、その要因などを第 2 章から第 8 章までの個別のテーマを通貫してまとめ、現在みられる民族文化のどこにモンゴル族伝来の文化があり、どこに漢民族文化からの影響があり、これら異文化の接触と融合によってどこに文化の再編、再創造が生じているかについて整理している。

2, 本論文の評価

本論文は以下の点において評価できる。

2010 年以降、計 14 回の現地調査を実施し、全体を合わせるとほぼ満遍なく 1 年の各季節を通して参与観察をしている。これは一つの村落の生活文化全般を定点観測するには重要なことである。その結果、本論文は従来の研究がある分野、たとえば牧畜から農耕への生業変遷、言語の接触変異、漢族の流入による社会変容など特定の問題を重点的に論じていることが多いのに比べ、対象を総体的に捉えることを可能とした数少ない精密なフィールド研究となっている。本論文はこのように四季を通じて生活文化を多角的な視点から総合的に論じ、厚みのある民俗文化誌として描きあげた点がまず評価できる。

ドルブットモンゴル族は他のモンゴル族と比べると、清代に早くも遊牧生活から定住生活へと転換する道を歩んできたため、漢化したモンゴル族であるとか真のモンゴル族ではないなどと言われてきた。その発展史のなかで現在の様相を観察したとき、伝統文化やモンゴル族の価値観が消失し、優勢民族に同化しているかといえそうではない。本論文は異民族間の異文化交流によって、どのような文化変容が生じているかを論じようとしたものであるが、接触過程にみられる維持、吸収、融合、消滅などの文化現象以外にも、地域環境的な特徴をもった新たな民族文化が形成されていることを実証している。

そのために、家族・親族構成、社交関係、衣食住の生活様式、牧畜・農耕生業、出産・婚姻・葬送などの人生儀礼、年中行事の祭祀、民間遊戯、信仰活動など村落社会を構成する多様な側面から、ドルブットモンゴル族の現況を総体的に把握し、次に交錯した個別の文化要素から自民族の伝統文化、外来の漢民族文化、蒙漢文化が融合した新しい民族文化の要素をそれぞれ取り出して整理している。大枠としては、家族、牧畜業、信仰面ではモンゴル族の伝統文化の継承が強く、衣食住、人生儀礼、年中行事などの側面では漢民族文化の影響を受け、文化の再創造がおこりやすいという。これによって外来文化の浸透によっても家族、牧畜、信仰というような民族文化の内的空間を塗り込めてきた要素は維持されるものであり、新しい文化の創造は地域環境の変化への適応性と不可逆な近代という時代性

論文審査の結果の要旨

の特徴をもった要素が優先される生活面で発生することがわかる。

布村という辺縁にある小さな村落の歴史と出来事の研究は、一つには中国他地域におけるモンゴル族の生活文化の変容研究およびその比較研究を推し進める上で有益な視点と資料を提供するものであろうし、さらには異文化の接触による文化の再編という人類学的なテーマに対する事例研究として敷衍的な価値をもつものである。

問題点

一方議論が十分に展開できなかった側面もある。

本論文は主としてモンゴル族と漢族との異文化接触をあつかい、事例研究として深い記述となっているが、理論面での貢献があまりない。文化人類学では異文化の交流による文化変容の課題は過去に蓄積も理論もあるので、その積み上げの上に、本研究がどういう面で貢献したかをもっと全面に出してほしかった。

また文化の再創造は本論文の主要な課題となっているが、異文化が融合してこれまでにない新しい文化ができてきた事実を指摘するだけでは十分ではなく、新文化が生活面で、これまでに、あるいはこれから、どのような意義と機能をもって生活者の将来を形づくっていくのか、その展望を示せれば望ましいことである。文化は常に変化と流動の過程にあるのでピン止めで固定はできないが、動態研究は文化の諸要素が再編されて、その社会に適的な付加価値が生み出される要因を探る研究でもあるので、その要因から予測できる新しい社会の構図も描けるものと思う。

終章でドルブットモンゴル族のアイデンティティの問題に触れている。モンゴル人であり、ドルブットモンゴル人であり、東北人であり、中国人であるという複合的なアイデンティティは、その文化の多重性にも観察されるというが、本文中でこの問題に特に取り組んで詳述した箇所はない。終章のまとめとして、総括的に述べるには唐突であるし、アイデンティティのような心理的に可塑的であり、自己の政治的、経済的、文化的立ち位置の自覚によって左右されるような問題には当事者への聞き取りをもって論証すべきである。

このようにさらに深く議論を展開すべきところも残されているが、それらについては今後の発展課題として期待できるものであり、本論文の価値や独創性をそこねるものでは決していない。

3. 評価結果の判定

上記4名の委員からなる審査委員会は、平成28年7月25日、本審査委員会を開催し、博士課程(後期課程)のあるべき水準を満たしている、オリジナルな成果を含んでいることなどを確認・評価した。

よって本論文は博士(学術)の学位に値するものと判断する。